

奈良市農村民家調査

建造物研究室

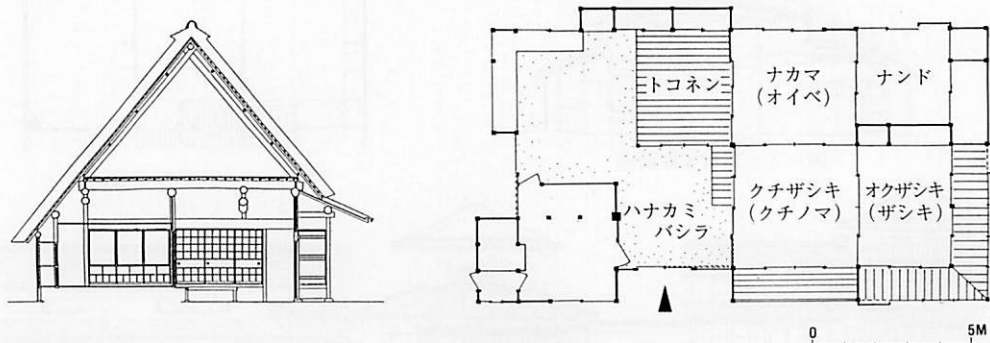
昭和58年度から4ヵ年にわたり奈良市全域において、農村民家の悉皆調査を行った。過去3ヵ年は一次調査として主に外観からの調査を行い、調査物件は130集落・約1,000棟におよんだ。本年度は一次調査物件より良質な農家39棟を抽出し、二次調査として平面・断面の実測、復原調査、聞き取り調査を行った。

建築年代は幕末から明治のものが多いが、17世紀頃と考えられる武野義正家（大安寺町）を最古として、18世紀以前に遡ると考えられるものが8棟みられた。資料より建築年代が明確になるものとしては堀内薫家（高樋町 享保二年 棟札）が古い例である。棟札を残すものは堀内家以外にはなく、板絵図、墨書銘、過去帳、祈禱札によって年代が判明したものが数棟あった。

平面形式は二間取、三間取、四間取、六間取があり、大規模なものとしては、九間取の武野義正家がある。四間取が26棟と最も多く、次に六間取が6棟、その他が数棟ずつである。四間取の一般的な部屋構成は下図のとおりである。四間取では喰違い間取は少なくほとんどが整形四間取となり、喰違い間取の場合はナンドが狭くなる。六間取は比較的新しく、古いものでも19世紀前半頃と考えられる溝口忠男家（佐紀西町）があるにすぎない。また3棟は明治時代に落棟座敷を増築し、四間取から六間取となったものである。三間取は数少なく（3棟）19世紀前半から中頃のものであるが、いずれも前座敷型の三間取である。

座敷は一般的に表側にある。座敷とナンド境に床・仏壇を設けナンドを閉鎖する形は東山の山間部に限られ、明治頃迄みられる。居室土間境には、ツキトメ溝または1本溝により板戸を片側に引き込む形をとるものがあり（約4割）、両形式とも明治まで存続する。居室間にもツキトメ溝を用いるのは岩本泰一家（長谷町 18世紀初）のみである。さらに古風な形を残すものとして、クチザシキの土間境を土壁で閉ざす清水龍三家（南椿尾町 18世紀後半）がある。

架構は全て上屋梁上に叉首を組む。上屋筋の柱を省略し下屋を部屋に取りこむ形式は18世紀には既にみえ、一方上屋筋の柱を省略しない形も明治まで残る。 （島田敏男）



岩本泰一家断面図・平面図